

主題：キリストの支配にゆだねた歩み③

聖書箇所：コロサイ人への手紙3章17節

テーマ：キリストにすべてをゆだねた歩みとはどのようなものか？

今週も一緒に見ていきたいのは、コロサイ人への手紙3章のみことばです。私たちはここ数回にわたって、キリストの支配にゆだねた歩みについて3：15－17を中心に学んできました。その続きをきょうは最後17節から考えてみたいと思います。ではまずいつものように、みことばをお読みします。これまでの流れを思い返すためにも15節から読みますので、それぞれ神様のことばによく耳を傾けてみてください。

コロサイ3：15－17

「:15 キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。:16 キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。:17 あなたがたのすることは、ことばによると行いによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。」

皆さんは炎のランナーという映画を見たことがあるでしょうか？ご存じないと言われる方もいると思いますが、この映画は1924年パリで行われたオリンピックに出場したひとりの信仰者エリック・リデルという人物の物語を描いたものでした。この物語の中で、最もよく知られている場面は、神様に対する彼の信仰と妥協のなさかもしれません。献身的で熱心なクリスチャンだったリデルは、自分の得意種目であった100m走が日曜日に予定されていることを知ると、走るのを拒否するのです。その結果、当時のマスコミは彼を酷評し、友人たちも彼を軽蔑するようになります。愚かな非国民だと周りからバカにされるようになりました。しかしそんな渦中、任された400m走に出場した彼は、本来自分の競技ではなかったにもかかわらず、見事優勝し、金メダルを獲得するのです。人々に嘲笑されていたリデルは、こうして栄光を手にするようになりました。紛れもなく彼は実際に最高のアスリートであり、また何より神様を愛し、神様の栄光のために走ったすばらしい信仰者でした。その様子を映画はわかりやすく描いていたのです。

でも、この話にはまだ続きがありました。アスリートとして偉業を成し遂げた後、彼はなんと手にした名声や栄光をみずから捨てて、自分の生まれた地、中国へ宣教師として向かうのです。リデルの生涯に関する本を記したダンカン・ハミルトンという人物は、彼の考えをこんなふうに表示しています。リデルは陸上競技を自分の人生を生きる唯一の理由というよりはむしろ人生の付録として考えていたと。こうして中国の地にあって、彼は多くの人々にキリストを宣べ伝えました。そして最後には、第二次世界大戦中の日本軍に捕らえられて脳腫瘍を患い、この世を去ることとなるのです。リデルという人物は、まさに神様の栄光のために生きた人物でした。彼は神様のために金メダルを目指して一生懸命に走り、また神様のために福音を大胆に宣べ伝えながら、この世でのレースを最後まで走り切りました。主の栄光のために生きていくということが彼の人生にとってのすべてであって、彼にとって最大の焦点だったのです。

そしてこの焦点は、今の私たちにとっても同じです。いつもキリストに心を留めて主の栄光のために生きていくことこそ、私たちひとりひとりにとって何にもまさる大切な責任であり、また特権でもありました。改めてみことばを見ていく前に、一度考えてみてください。果たして私たちの日々の歩みは今、主の栄光を現し続けているのでしょうか？私たちは神様のために、すべてのことをなし続けているのでしょうか？きょう私たちが見ていくのは、まさにこの点についてです。ここ数週間にわたって、15－1

7節を通して、私たちがいつも焦点を置いておくべき存在——イエス・キリストについて、パウロが繰り返し教えていることを見てきました。例えば15節では、私たちがいつもキリストの平和によって支配され続けることを教えていましたし、16節には、キリストのことばを私たちがいつも豊かに住まわせ続けていくようにと教えられていました。キリストの平和が、キリストのことばが私たちの歩みをいつも支配していることが命じられていました。

○キリストの支配にゆだねた歩み：“主の御名”のために生きる 17節

そして、そんな彼が最後17節でこうまとめていくのです。17節の終盤に「すべて主イエスの名によってなし」と書いてありました。私たちはすべてのことにおいて、主イエスの御名のために生きていくことが求められていました。でも、これはいったいどういうことでしょうか？私たちは主の栄光のために生きていくということをよく口にはします。でもこれはいったいどのような生き方を表すのでしょうか？きょうはそのことを改めて一緒にみことばから考えてみましょう。パウロはその生き方に関して、その意味と生き方の範囲、生き方の動機、この三つの要素をここで教えてくれています。順に追って考えていきましょう。このみことばがますます主の栄光を現す者として成長する助けと励ましになることを心から祈っています。

1. 意味：

ではまず意味から考えてみましょう。17節でパウロは「あなたがたのすることは、ことばによると行いによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。」と記していました。まず注目してほしいことは、ここで中心となっていることばです。パウロはここではっきりと信仰者たちが「すべて主イエスの名によってなし」ということを教えていました。主イエスの名によってすべてをなしていくというのは、実際にどのように生きていくことを意味しているのでしょうか？これは果たして私たちが「いつもイエスの御名によってやります」ということばを単に発することを表しているのでしょうか？私たちが朝起きる時に、食事をする時に、仕事や家事をする時に、くつろぐ時や夜寝る時、その前後どこかでいつも主の御名によって何々します、このフレーズを私たちがただ繰り返し口にすることを神様は求めているのでしょうか？もちろんそうではありません。ここで鍵になるのが使われていた「名」ということばです。「イエスの名」、この「名」ということばがポイントです。「名前」です。ご存じの方もおられるかと思いますが、この「名」というのは、聖書で、ある人物の性質や特徴、評判を表わすのによく用いられたりするものでした。簡単に言えば、その人がいったいだれなのかを表現するもの、それが名前でした。

旧約聖書において、名前はいろいろな人物のことを表していました。例えばエバはどんな名前だったでしょうか？創世記3：20を見ると、こんなふうに書いていました。「さて、人は、その妻の名をエバと呼んだ。それは、彼女がすべて生きているものの母であったからである。」と。エバという名は、「すべて生きているものの母」という意味がありました。アブラハムに関しては、創世記17：5に、「あなたの名は、もう、アブラムと呼んではならない。あなたの名はアブラハムとなる。わたしが、あなたを多くの国民の父とするからである。」とあります。アブラハムという名は、「多くの国民の父」を表していました。もうひとりナバルという人物もIサムエル25：25にこんなふうに使われています。「ご主人さま。どうか、あのよこしまな者、ナバルのことなど気にかけないでください。あの人は、その名のとおり男ですから。その名はナバルで、そのとおりの愚か者です。」と。名前が愚か者というのは余りうれしくありませんよね？でもその名のとおり的人物でした。ナバルという名は、その人物の姿を表していたのです。いずれにしろ名前というのは、その人物がいったいだれなのか、その人物の性質や評判や特徴を表しているものでした。

そしてここで、主イエスの名によってすべてをなすと言われているのは、単にこのフレーズを口にすることではありません。これは私たちがその人物の性質や姿、特徴をまず覚えて、これを現す者としてすべてをなしていくことを意味していました。もう少し簡単に言うのであれば、主イエスがいったいだれ

なのかということを中心から認めて、この主の姿を現す者として私たちが生きていくことを言うのです。主イエスがいったいだれなのかということを知るためには、そのことをまず知識として知らなければ何も始まりません。でも同時に、知識として知ったその姿を知識のままとどめるのではなく、その姿に私たちが心を留めて、そのキリストの姿が私たちのうちに見られるように実際に歩んでいこうとするのです。

イエス・キリストの姿を私たちが覚える時に、どんな姿を思い浮かべます？もちろんそれぞれにイエス・キリストのいろいろな姿を思い浮かべるでしょう。でも特にこの手紙の文脈を振り返って考えれば、パウロは十分なイエス・キリストについてずっと語り続けてきました。例えば1:15-20には「御子」ということばがたくさん出てきます。15-20節で、パウロは御子イエス・キリストの姿を描いていました。15節からこう書いています。「:15 御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。:16 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。:17 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。:18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。:19 なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、:20 その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、御子のために和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。」と、キリストの姿が描かれていました。イエス・キリストこそまことの神様でした。イエス・キリストこそすべてを造られた創造主であり、永遠に変わることのない主権者でした。教会のかしらであり、死からよみがえられた第一のもの、和解をもたらしてくださった救い主。そしてそんな御子こそすべてのことにおいて第一のもの、すべてにまさる十分な権威者だったのです。そしてそんなキリストを個人的に知ったのであれば、私たちはこの方に心を留めて歩んでいこうとするのです。単に知識としてではなく、このキリストの姿を私たちは日々覚えながらすべてのことをなしていこうとするのです。

果たして私たちは、そもそもこの方がだれなのかということをも覚え続けているのでしょうか？具体的に考えてみてください。例えばキリストがまことの神様であるという真理を、私たちは覚えているのでしょうか？キリストがまことの神様であるからこそ、私たちのすべてをいつもごらんになっておられること、すべてのことをいつもご存じであられることを、私たちが覚えながら日々を歩み続けているのでしょうか？キリストが最高の主権者であること、キリストが最高のかしらであることを覚えた時に、私たちはこのキリストが私たちのかしらであって、私たちの主権者であって、私たちはキリストのしもべであることを覚えながら日々を歩み続けているのでしょうか？キリストがあわれみ深い救い主であって、十字架で示してくださった愛や犠牲というものを、その姿を日々思いめぐらしながら私たちは歩み続けているのでしょうか？キリストの姿を私たちは覚え続けているのでしょうか？また加えて、私たちがその姿を覚えているだけではなくて、この方の性質や特徴というものを私たち自身が現し続けているのでしょうか？キリストがいったいだれなのかということをも、周りの人たちは私たちのうちに見るのでしょうか？私たちがキリストの完全な聖さや正しさを覚え続け、主の姿を現す者として、私たち自身も聖い者として、正しさを求める者として歩み続けているのでしょうか？キリストの測り知れないへりくだりの模範や、与えられた犠牲的な愛を私たちが覚えるだけではなく、その主の姿を現す者として、へりくだった者として、犠牲的な愛を示す者として歩み続けているのでしょうか？

別のみことばもこんなことを教えてくれていました。Ⅱコリント5:18-20に「:18 ……神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。:19 すなわち、神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことばを私

たちにゆだねられたのです。:20 こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。」と。パウロははっきりと教えていました。イエス・キリストを救い主として、主として信じた者はだれであれ、「キリストの使節」となりましたと。神様から和解の務めとそのことばをゆだねられた主の使者として、私たちは生きていますと。この「使節」には大きな責任がありました。ある牧師はこのことばを次のように説明しています。

「使節であるという考えには、多くのことが含まれています。使節は聴衆を喜ばせるためにではなく、彼を遣わした王を喜ばせるために話します。おのれの権限で話すのでもなければ、自分の意見や要求も意味を持ちません。ただ自分に託されたことばを伝えるのです。しかし、使節は単なる伝令係でもありません。代表者であり自国の名誉と評判がその手にゆだねられているのです。」と。少し考えてみてください。当然かもしれませんが、使節として派遣されている者が、遣わされた王のところに出て行って、遣わした王の意向やことばを正確に伝えなかったとしたら、どんなことが起こりますか？恐らくそこには混乱が生じてしまうでしょう。ましてや王の意向やことばとは異なった遣わされた者が勝手に考える要求や思いを伝えるとすれば、その国家の間は恐らく大きな問題を抱えることになるでしょう。

そしてだれに一番泥を塗るのかと言うと、使節を遣わした王に泥を塗ることになるのです。忘れてはならないのは、私たちは今みなキリストの使節としての務めを神様からゆだねられているということです。もし私たちがキリストによって罪を赦され、恵みによって救われたのだと言うのであれば、その時に、私たちはみな神様から使者としての和解のことばをそれぞれにもう託されているということです。救われているのであれば、私たちはキリストの使節として、今歩んでいます。例外はひとりとしていません。だとすると、果たして私たちはキリストを代表する者として、それにふさわしい歩みをしているでしょうか？

キリストの使節ということを考える時に、私たちは感謝することもできます。かつて神様の敵として歩んでいた者を、神様は救ってくださっただけでなく、ご自身の使節として遣わして下さっているのです。ご自身を代表する者として私たちを用いて下さっているのです。私たちは、そんなすばらしい神様の偉大さをほかの人にも知ってほしいと願って、日々を歩んでいるのでしょうか？私たちを通してキリストのすばらしさを伝えたいと歩んでいるのでしょうか？確実に言えるのは、もし私たちがいったいだれに遣わされているのかということ、仕えている王がいったいだれなのかということをおぼえてしまうのであれば、その責務を果たすのは難しいということです。私たちが、王が言っていることばをわかっているならば、王が言っていることばを覚えていなければ、伝えに出ていっているはずの私たちが伝えることばは、王が言っていることと異なったものになってしまうかもしれません。だからこそキリストのことばをいつも私たちのうちに豊かに住まわせ続けなさいと、パウロが言っていました。私たちにもその必要があるのです。私たちがみことばを通して私を遣わした王の姿を知り、みことばを通して主の姿や特徴を知り、それに目を留め続けて決してそれを忘れないことを通して、私たちは使節として歩んでいこうとするのです。イエスの名によってなすということは、私たちに神様が求めておられる生き方でした。私たちは主イエス・キリストがいったいだれなのかということ、をいつも覚えて、この主のすばらしさを現す者として生きていこうとするのです。

2. 範囲：

でもパウロはこれでことばを終えてはいませんでした。加えて彼は、この生き方に関する範囲について教えていました。もう一度17節をよく見てください。17節は「あなたがたのすることは、ことばによると行いによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。」と始まっていました。最初に、「あなたがたのすることは、ことばによると行いによるとを問わず、すべて」と書いていました。さて、質問です。「主イエスの名によって」なす生き方というのは、私たちの生活のどの範囲にまで及ぶのでしょうか？どの部分において、私たちはキリストのすばらしさを現そうとするのでしょうか？ことばだけでしょうか？行いだけでしょうか？ひとりで何かをしている時だけでしょうか？だれか

と何かをしている時だけでしょうか？答えはもう明白です。私たち信仰者は、文字どおりすべての面において主の栄光を現そうとするのです。言いかえれば、私たちの日々の生活において、主のすばらしさを現さないという部分は一つとしてないということです。17節で単に、「あなた方のすることは主イエスの名によってなし」と言われても十分意味はわかるのです。でもそうではなく、パウロはことばを積み重ねていました。どんなことばを積み重ねていたかという、「ことばによると行いによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし」と。パウロはこうしてこの生き方を強調していました。キリストのすばらしさを知ったのであれば、たとえ何をやるにしても、すべてにおいて主の姿を現す者として生きていこうとするのだと言うのです。

ここで用いられていた「ことば」と「行い」という二つのことばは、二つセットで用いられた時、特にある人物の生活の全体を表していました。例えば、モーセの歩みを表現するのにこのことばが使われていました。使徒7：22に「モーセはエジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにもわざにも力がありました。」と書いています。またモーセだけではありません。イエス様の全体を表すのにも使われていました。ルカ24：19に「ナザレ人イエスのことです。この方は、神とすべての民の前で、行いにもことばにも力のある預言者でした。」と書いています。ですからパウロがここで言わんとしていたことは明白でした。信仰者はことばだけではなく、行いだけでもなく、その歩みのすべてにおいて、いつもイエスの名によってなしていくことが求められていたということです。どの分野においても、どの部分においてもキリストを絶えず現す者として生きていくことが求められていたのです。どんな時も、どの分野においても、その揺るがない事実をだれひとりとして見落とすことがないように、パウロはここで何度も同じ似たようなことばを繰り返していました。「ことばによると行いによるとを問わず、すべて」と。

では、改めて自分自身のこととして一緒に考えてみてください。果たして私たちの歩みはどんな時もすべての面において主の姿を、主のすばらしさを現しているのでしょうか？週の中において、日曜日は神様のためです、それ以外の日は自分のためですと、私たちが勝手に違いを設けていないのでしょうか？1週間だけではなく、例えば一日の中で、この時間は神様のために、この時間は自分のためにと、私たちのうちに区別を作っていたりしないでしょうか？明白なことが言われていました。どこにいても、だれにいても、何をしても、何を話していても、どんな状況においても、私たちは主の御名によってすべてをなしているのでしょうか？ある人は、時に信仰者の歩みというものを自分の好きな時にだけ働けるまるでパートのようなものに考えていたりすることがあります。今回メッセージの学びをしている中で、こんな記事を見つけました。とても考えさせられる内容だったので、皆さんもぜひ読んで考えてみてください。「あるラジオ番組の司会者が『私はクリスマスとイースターはクリスチャンです。』と自身の宗教観について述べる男性について取りあげていた。その人物はキリスト教をパートタイム労働者のように考えているようだった。そして、敢えて信仰を一年に二日だけに限定しないとしても、私たちの多くはパートタイムクリスチャンのような形を取っていたりする。毎日毎秒一貫して信仰を実践するのではなく、時間と場所を選んで信仰を実践しているのだ。……イエスは日々自分の十字架を負い、わたしについて来なさいと言われていた（ルカ9：23）。この方が十字架の上で耐えがたい残酷な死を遂げたのは、私たちがいつイエスに従いたいかを選べるようにするためではない。なぜ、私たちは時に背を向け、救い主に手を引けと言わんばかりの態度を取るのだろうか？たいていの場合、それは聖書の明確な教えに従わないからだ。例えば、『絶えず祈りなさい』（1テサロニケ5：17）ということ拒めば、私たちは自己満足に陥ってしまう。全てを『主に対してするように、心からする』（コロサイ3：23）ことをやめれば、私たちは自分のために生きるようになる。イエスに従うというのは、フルタイムの献身である。パートタイムのクリスチャンになれると考える畀にはまってはならない。」。これまでも何度も聞いてきたことかもしれませんが、でも決して忘れてはいけません。自分の人生の半分だけ神様のために生き、半分は自分のために生きる、そんなクリスチャンはひとりとして存在しないということです。

熱心な信仰者は、自分のすべてを主の栄光のためにいつもささげ続けて、そうでない信仰者は時々主の栄光のために自分をささげるのでもありません。真に救われた者はみな、例外なくすべてにおいていつも主の栄光を現す者として生きていこうとするのです。そのことをみことばもはっきりと教えていました。Iコリント6：19－20に、「19 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。」、またもう一つIコリント10：31に「こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。」と書いていました。キリストの犠牲によって買い取られた私たちは、今ただ主に感謝し、主のために生きていくのです。私たちのからだはもう自分自身のものではなく、代価を払って買い取ってくださった方のものでした。そして代価を払って買い取ってくださった神様の栄光を現すことが、私たち値しないものを受けた者として最もふさわしい応答だったのです。買い取られた者は、その方の栄光を現す者として生きていくのです。食べるにも、飲むにも、つまりどんなことをする時においてもです。神の栄光を現すために、すべてをなしていくのです。

もちろん私たちはみな主の御名によって、すべてをなしていくことにおいて、常に成長し続けていかなければいけない部分が数多くあります。その中であって、主のすばらしさを現す者として成長したいという思いはますます増し加わっているのでしょうか？キリストの偉大さをますます私たちが知る中であって、そのキリストにさらに似た者となっていきたい、その栄光を現す者へと変わり続けていきたいという熱意は日々強まっているのでしょうか？カルヴァンもこんなふうに言っていました。「私たちの生活は、私たちの言動の全てがキリストの権威によって完全に支配されるようではなければならない。その目的は、主の栄光を仰ぎ見ることなのである。」と。このコロサイのみことばを記したパウロは、まさにその目的のためにすべてを生きていた人物でした。地上での生活において、彼は数多くの試練を味わって、罪との葛藤を経験し続けたからこそ、今すぐにでも主のみもとへ行きたいと望んでいたのです。でもそうやって天を見上げながら、彼はこんなことを言っていました。IIコリント5：8－9で、「8 私たちはいつも心強いのです。そして、むしろ肉体を離れて、主のみもとにいるほうがよいと思っています。9 そういうわけで、肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。」とあります。パウロにとっての願いは、生きるにしろ、死ぬにしろ、ただ主に喜ばれることをなし続けていくことでした。そしてそのことばを彼は最後まで忠実に歩み続けていたのです。

愛する兄弟姉妹の皆さん、私たちも同じだということです。私たちがどこにいても、私たちがだれといっても、私たちが何をしていても、私たちが何を話していても、どんな状況にあったとしても私たちは主の御名によって、すべてのことをなしていこうとするのです。改めて自分自身のこととして考えてみてください。例を挙げれば限りはありませんけれども、例えば学校や職場において、私たちがなしていることはすべて主の誠実さを現すものでしょうか？家庭や教会で話す私たちのことばは、すべて主の愛やあわれみを現すものでしょうか？部屋でひとり時間を過ごす時に、目にするものは主の聖さを現すものでしょうか？気難しい同僚や気が合わない友人との会話は、すべて主の忍耐や寛容さを現すものでしょうか？果たして私たちの歩みのすべての面が神様を喜ばせるキリストの偉大さやすばらしさを現すものでしょうか？主イエスの名によって、すべてをなすことが神様の求めておられる信仰者の生き方の範囲でした。

3. 動機

さて、ここまで学んできて、命令は確かに非常にシンプルなものでした。でも内容は非常に厳しいものです。もしかすれば、ある人は今悲壮感に暮れているかもしれません。頭の中をいろいろな戒めやルールがめぐって、重荷を感じて喜びを失っているかもしれません。私自身もこのみことばを一週間考える中で、さまざまなチャレンジを受けました。弱さや愚かさというものを私たちはみな持っています。でもだ

からこそ最後のことばが重要でした。もう一度17節をよく見てください。パウロはあることばをつけ足して、主の御名によってなす生き方に関する動機を教えてください。17節に「すべて主イエスの名によってなし」、その後、「主によって父なる神に感謝しなさい。」と書いています。いったい動機とは何だったのか——。それは感謝でした。神様に対する心からの感謝が信仰者を突き動かす最も大きな力だったのです。そしてこの15節から、パウロは「感謝」ということばを繰り返し、繰り返し終わりで用いています。15節では「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。」と書いていました。16節も「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。」、そして17節に「あなたがたのすることは、ことばによると行いによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。」と。

パウロはわかっていました。私たちの心がキリストの平和やキリストのことばによって支配され続けていれば、私たちが神様のことばを通して、神様の偉大さを正しく知れば正しく知っていくほど、私たちのうちに現われる自然な応答は、ただ神様に対する感謝しかないということです。でもまさにそのとおりだと思います。私たちがみことばを通して、かつて神様の敵であった自分が、キリストにあって神様と和解したことを知る時、かつて神様の前に自分が負っていた絶対に返すことのできない罪の負債のすべてが、キリストにあってもう支払われたことを知る時、かつて神様から遠く離れ、希望も望みもなく滅びへと向かっていた私に、神様が値しない恵みを与えてくださり、罪を赦してくださったのだと知る時に、私たちは、神様、こんな罪人である私を救ってくださったことを感謝します、御怒りのみが値するこんな者に値しない恵みを与えてくださったことを感謝しますと。こんな愚かな者に対して御霊を与えて助けを与えてくださり、十分なみことばをいつも与えてくださり、そして教会を、神の家族を与えてくださったことを感謝しますと、必要なすべてを与えてくださるそんなあなたに感謝しますと、私たちはただほめたたえることしかないので。

神様がだれなのかということを知り、私たちが何かをなす前に主が何をなしてくださったのかに心を留め続ける時に、私たちのうちには必ず感謝があります。でももし逆に、私たちがキリストから目を離して、神様の姿を忘れてしまうのであれば、私たちは間違いなく不平不満を覚えるようになります。不平不満というのは、神様を忘れて、自分や自分の状況に目を奪われている者の特徴です。自分の思いどおりにならず、自分の理解できない状況に置かれている時、自分が値しないものを受けるとなれば、自分にとらわれている者はいらだちや失意を覚えます。私たちはいつも感謝する者でしょうか？それとも不満を抱く者でしょうか？確かに私たちは例外なく、自分自身に何が起きているのかわからないような不安を覚えてしまう状況に陥ることはあります。どうしても私たちはいろいろな関係において難しさを覚えてしまって、これはどうなるのかと失意を覚えてしまう時もあります。でもそんな時にこそ私たちは覚えるのです。変わらないまことの神様は、変わらない主権者である神様は、昔も今もお変わらず支配し続けてくださっているのだと。私たちが罪から救い出すことのできた力ある神様がどんな時も自分を守ってくださり、どんな時もすべてにおいて働いてくださっているのだと。そして何よりも十字架において和解をもたらし、死からよみがえり、今もなお変わらず生きておられるすべてにまさる十分なキリストがいつもともにいてくださっていると。

私たちが何かをする前に、まず神様やキリストの姿を正しく覚え続けるのであれば、私たちのうちには必ず感謝が出てきます。値しないものを受けたことに対する喜びが、賛美が出てきます。そこに目を留め続けることです。そしてその時に、私たちのうちに感謝があふれてくる時に、私たちはその感謝を動機として、主の栄光を現すためにすべてのことをなしていこうとするのです。どんな時も感謝する理由を私たちは持っています。だからどんな時も感謝しながら、主イエスの御名によってすべてをなしていく

こと、それが私たちひとりひとりに与えられた大きな責任であって、そして何よりも私たちにとっての特権でした。初めに見たエリック・リドルも、またパウロも同じように生きていました。主の栄光のために歩み続けていました。その模範に倣い続けていくことです。主の栄光のために生きていく者として、ともに続けて成長していきましょう。